

インド国立公文書館所蔵 ギルギット写本概観

工藤順之

はじめに

「ギルギット写本」(Gilgit Manuscripts)とは、1931年に、現在のインドとパキスタンの国境紛争地域にあるギルギット（インドとパキスタンの国境を接する地域にあり、現在はパキスタン国内。カラコルム山脈に囲まれた、標高1500m程度のところ。町の北側にはインダス河に注ぐ、ギルギット河がある）近郊のナウプール村(Naupur, Navapura)にある仏塔(ストゥーパ)跡(とされる場所)から発見された一群の仏教写本のことである。この場所からは二度にわたり発掘がなされたが、そのときに出土したものを狭義の「ギルギット写本」と呼ぶ。近年になり、同じ文字で書かれた写本がギルギット周辺を含む北西インドから発見され、これらも広義では「ギルギット写本」と呼ぶことが出来る¹⁾。本稿では、狭義の「ギルギット写本」のうち、その大部分を占めるインド国立公文書館(National Archives of India)所蔵分を取り上げることとする。

1.1. ギルギット写本の発見

ナウプール村の仏塔跡とされる場所は、ギルギット中心部からギルギット河を隔てた対岸の、北に約5kmのところにある。写本発見の第一報は当時(1931年6月)その付近を訪れていたイギリスのオーレル・スタイン(Sir Aurel Stein)によるものであった²⁾。即ち、1931年5月終わり頃、地元の少年たちによって村の丘の上にある、おそらくは仏塔跡と思われる場所から古文書が発見された、というものである。スタインは写本を収めた箱を当地の収税

吏の一室で実見し、それらが仏教の経典類であること、トルキスタンで発見された写本とよく似たブラーミー文字で書かれていることなどを解読した(この時にスタインは何葉かの写本を村人から買い取りイギリスに送った)³⁾。

この偶然の発見についてのより詳しい報告は、同年7月22日に同地に到着した、フランスのシトロエン探検隊(Citroën Mission)のアッカシ(Joseph Hackin)が残している⁴⁾。それによれば、発見地には南北に4つの土饅頭様の丘(A~D)があり(図1)、そのうちCから写本が出土した(図2)。その仏塔跡の基壇になる部分は周囲は18m、高さは12~15m、内室(inner chamber)は内壁の厚さが1.8m、差し渡しが5mになる。その中には一本の主柱と4本の柱と思われるものが残り(図3)、粘土作りの仏像、5つの木製

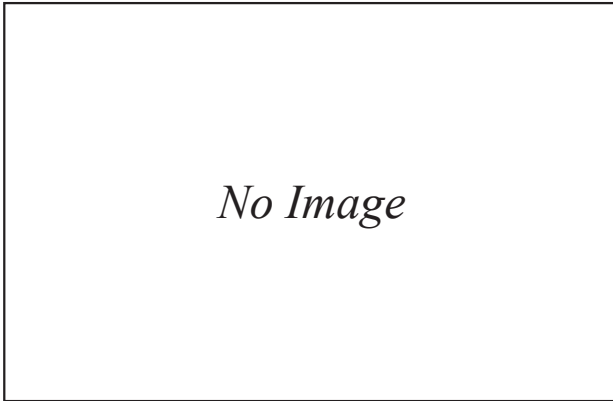


図1 ギルギットの北方、川の対岸の丘にある土饅頭のような遺跡

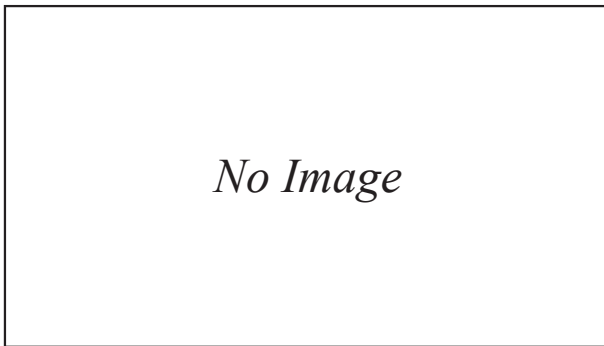


図2 写本が発見された遺構C



図3 中央の柱

の箱などがあったという⁵⁾。

1.2. 二度目の発掘

1931年の発掘は実際には偶然的になされたもので⁶⁾、何をどのように発見し、発見されたものがどのようなもので、それらがその後どうなったかについては正確に記録が残っていない。正式な発掘調査は1938年に考古学者カウル・シャストリ (Madhusudan Kaul Shastri) によって実質的にはわずか一週間 (8/20~26) だけ行われた⁷⁾。その発掘は次のようなものであった：

20日に、先ず墳丘Cの発掘が行われた；

翌21日は同じ墳丘を調査し、摩滅した樺皮写本ともう一つの完全な写本 (No. 1『僧伽吒経』 *Samghāṭasūtra*) が中央の柱の下、7フィートのところから発見された；

22日には、墳丘CとAとで発掘が行われ、Cから摩滅した樺皮数葉といくつかの小さなストゥーパと完全な写本 (No. 2『僧伽吒経』) が外側中央にある柱の交わるころ、南側7フィート9インチの深さから発見され、それより少し深い場所で他の写本 (No. 3『僧伽吒経』) も発見された；

23日には遺構Cから貝葉写本 No. 4 **Āryadharmā* が、そしていくつかの破損した写本断簡が発見された；

24日、25日に遺構Cでの発掘がおこなわれたが、何も発掘されなかった；

26日に遺構周辺を発掘したが何も発見されなかった。

つまり、写本は遺構Cからのみ発見されている。完全な写本4本はそれぞれ2枚の木製カバーに挟まれていて、Nos. 1, 2, 4のそれらには内側に彩色が施されて、仏・菩薩に帰依する、おそらくは在俗信者が描かれている⁸⁾。

1.3. 写本の分割・移管

1931年に発見された写本は、1933年カシュミールのマハラジャ (Hari Singh) の命により州政府の管理下に置かれ、スリナガルに移管される。しかし、その間に散逸してしまったものがあつた。1947年印パ戦争の勃発により、

文化財保護の為に、写本はニューデリーの国立公文書館に移され（1948年）、現在に至る。

インド国内には3カ所に分割所蔵され、それぞれ所在地の名を冠して呼ばれる。

2.1. インド国立公文書館所蔵「デリー・コレクション」

インド国立公文書館所蔵の写本（Acc. no.: Gilgit Manuscripts）は1～62番までの分類番号が付されていて、ギルギット写本としては最も量の多いコレクションである（図4、5）。

全写本のリストはロケシュ・チャンドラ（Lokesh Chandra）によって1959年の論文に発表された⁹⁾。1957～60年にこのコレクションを調査したP. V. パパット（P. V. Bapat）によれば、写本には「その地域（即ちスリナガル。工藤補注）のパンディットが作った」リストが付いていて¹⁰⁾、パパットはそのリストを論文に転載しているが、各写本のタイトル・葉数は、ロケシュ・チャンドラが発表したリストのそれとはいくつか食い違っている¹¹⁾。

モノクロの写真版はラグ・ヴィーラ（Raghu Vira）とロケシュ・チャンドラによって1959～74年に10分冊で出版された（後に3巻に纏め直し、更に旧版



No Image

図4 ギルギット法華経写本（インド国立公文書館所蔵）



No Image

図5 分類番号45、図4の写本が収められている『法華経』写本（木製板カヴァー）

に含まれていない『般若経』写本など[nos. 26, 27, 50]を加えて再刊された¹²⁾。全写本のテキスト化はまだ為されていない¹³⁾。

2.2. 写本の分類

62 という、その最初の分類が誰によって（「現地のパンディット」としかわからない）、どのような基準の下でなされたのかは不明であるが、写本を包むカバー（発見時のオリジナルではない。現在、公文書館では木製板あるいは板紙二枚で写本を挟み、それを紐で束ねて保管している）に書かれたタイトルを見ると、今日の研究から見て正しくはないものがそのまま残っている（図6）。

分類の順序はおそらくは写本が入れられたボックス1から順になされたようで、内容ごとに分けられたものではない。現在保管されている状態でいえば、個々の写本を挟むカバーには写本番号とテキスト名（当時判っていたものの）、葉数が記され、更に“Box No.”が書き込まれている¹⁴⁾（図7、8）。

写本はほとんどが樺皮を貼り合わせたものからなり、Nos. 36, 38b, 48 の一部には紙が用いられている¹⁵⁾。写本は現在、各葉が表・裏のレイヤーに剥が

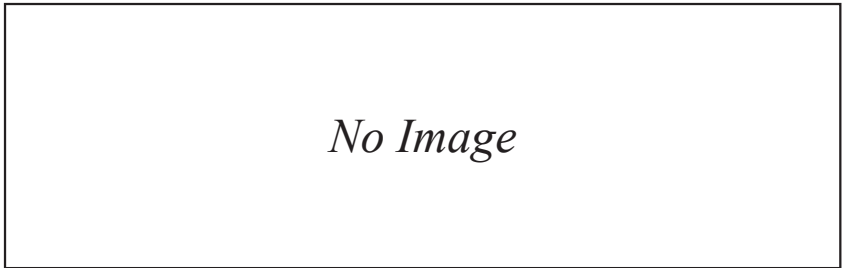


図6 分類番号49、『法華経』写本
（板紙カバー。但し、間違って“Jataka”となっている）

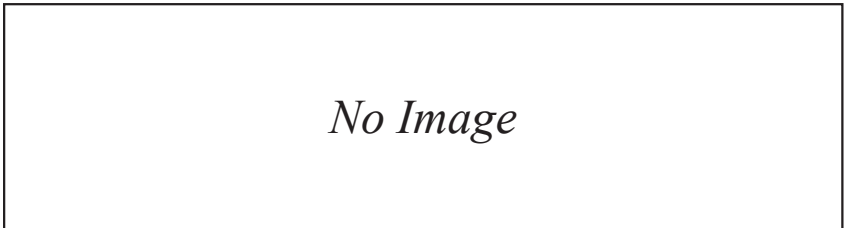


図7 分類番号1、『有部律』写本（木製板カバー。保管状態）

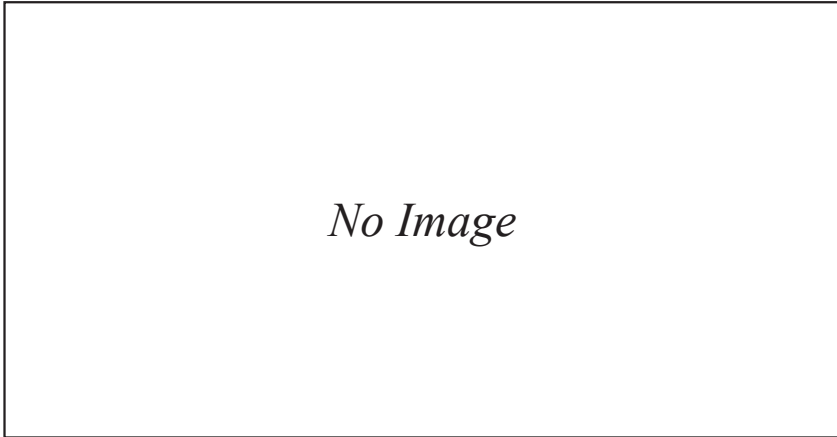


図8 分類番号47、『法華経』写本（木製板カバー。上板を外した状態）

され、それぞれ別の紙で裏打ちされ、さらにその両面を別の薄い紙状のものに貼り合わせる形で保存されている。保存の為の何らかの化学的処理がなされているようで、実際に手に取ると全体が薄い板状になっている。

2.3. 写本の文字

年代を推定する根拠の一つが写本で用いられている文字である。ギルギット写本で用いられている文字は「ギルギット・バーミヤーン型文字 (Gilgit/Bamiyan Type)」で、これに二種類ある（第1型と第2型）。

「第1型文字」（或いは「丸形グプタ文字 (round Gupta)」）は、丸みを帯びた形で、大体6～7世紀に用いられたもので、一般には現在のアフガニスタン、パキスタン、インダス河上流で発見された写本に見られる。

その後、より直線的な線で書かれ、線の太さと細さの対比が大きい文字が使われるようになる。これは「第2型文字」（或いは「プロト・シャーラダー文字 (Proto-Śāradā)」）と名付けられ、7世紀以降のものである。

ギルギット写本はこれらのいずれかによって筆写されていて、一部の例外はあるものの（後述）、第1型文字は大乗經典関係の写本に用いられ、第2型は有部律等の教団関係の写本に用いられている。年代的には大乗經典を筆写した写本の方が古いということになるが、何故そのように年代が異なる文字で

書かれ、ジャンルも異なる写本が一カ所に混在して残されていたのかの答えは、この発見された場所が何であったのかという問題の回答と密接に関わる。

以下、インド国内にある他のギルギット写本について簡単に触れておく。

3.1. スリナガル・コレクション

現在は J&K State Government Libraries and Research Department, Jammu & Kashmir の管理のもと、シュリー・プラタープ・シング美術館 (Sri Pratap Singh Museum) に所蔵されている (Acc nos.: 2689/A, 2689/B, 2689/C)。これらは 1938 年の二度目の発掘で出土したものとされている。

このコレクションについては、これまで『法華経』 (*Saddharmapundarikasūtra*) 写本 (30 葉) と『僧伽吒経』のみが研究されていたが、最近ゲッティンゲン大学のクラウス・ヴィレーによって全体像を明らかにするリストが公表された¹⁶⁾。

3.2. ウッジヤイン・コレクション

このコレクションは 1931 年に発見されたもののうち、34 葉からなり、ウッジヤインのスチンディア東洋美術館 (Scindia Oriental Museum, Scindia Oriental Research Institute, Vikram University) に “Bauddhāgama no. 4737” として収蔵されている。『増壹阿含経』 (9 葉)、『法蘊足論』 (19 葉)、『世間施設論』 (6 葉) の一部写本がある¹⁷⁾。これらは 1936 年にカシュミールで購入されたものらしい。

3.3. インド国外の写本

1931 年に発見され、現在インド国外で所蔵されている写本は、次の通り。
大英図書館所蔵：現在は “Or. 11878A-G” という番号で分類されている『有部律』11 葉 (A)、『法華経』7 葉 (B～G) である。スタインが入手したものである。
「トゥッチ・コレクション」 (パキスタン)：カシュミール政府の管理から漏れた写本の一部はイタリアのジュゼッペ・トゥッチ (Giuseppe Tucci) がかなりの写本を買い戻し、パキスタン政府 (カラチ国立博物館) に返還された¹⁸⁾。『法華経』 (20 葉)、『有部律』 (189 葉)、『般若経』 (49 葉) がある。

4. 発見場所は何であったのか？

発見場所が仏塔跡であったのかどうかは、今でも論争的である。スタンやアッカによる発見直後の報告では「仏塔跡」とされているが、近年になりこれとは異なる見解が発表されている。すなわち、フランスのフスマン (G rard Fussman) によれば、写本が発見された場所は四方に柱と中央の柱で支えられたこの地方特有の石造りの二階建ての建物跡で、おそらく僧侶 (しかも高位の僧侶) の礼拝堂或いは宿舎であり、そして写本はそれら僧侶たちの持ち物で階下の書庫のような場所に置かれていたのではなかったか、とされる¹⁹⁾。この廃墟が仏塔ではないことは、その周辺にはどのような僧院の跡も発見されていないと言う事実があるからである、とする²⁰⁾。彼らはここにおいて地域の有力者や在家の為の儀礼を行うなどの活動をしていた。

さらに、グレゴリー・ショペン (Gregory Schopen) はその場所は写本の書写室のようなもので、発見された写本とは、既に支払いが済んで引き渡すだけになっているもの、何らかの理由で引き渡されず或いは返却されたもの (発注者が死亡したため) などの理由によって残されたものである、と考える²¹⁾。いずれにせよ仏塔跡ではないという見解が主流になってきていると言える。

ところでギルギット写本には同じテキストの写本が複数発見され、しかもそのいくつかは異なった文字で書かれているという特徴がある。これはどうした理由からなのか。例えば、ショペンが指摘したように、『薬師経』 (*Bhaiṣajyagurusūtra*) は5写本が見つかっているが、そのうち No. 32 写本だけが第2型文字で書かれ、他の写本 (nos. 10b, 31, 34, 51a) は第1型文字である²²⁾。或いは、『僧伽吒経』は No. 39 写本が第2型文字で書かれ、他の写本 (nos. 16, 36, 37, 38a) は第1型文字である。

大乘経典だけではない。『スマーガダー・アヴァダーナ』 (*Sumāgadhā-avadāna*) という仏教説話は3種類の写本が残り、写本 A (nos. 7b, 10c) は第1型で書かれ、写本 B (nos. 51c, 52c) と C (nos. 51c, 52c, 59a, 60c とスリナガル・コレクションの5断片) は第2型である²³⁾。

もし、ギルギット写本が僧侶たちの持ち物であり、それらが書庫或いは写本の書写室のような所に残されていたとすれば (或いは新たに作成されて納められたものであったならば)、年代の異なる文字で書かれたテキストが複数見つ

ることは不思議ではない。場合によれば書写する際に、一方が書写元であった可能性もある。

ギルギット写本の一部に残る写本の奥書（特に『法華経』）と、周辺地域で発見された線刻文、仏像の台座に刻まれた奉納銘文を研究したオスカー・フォン・ヒニューバー（Oskar von Hinüber）はギルギットにはもともとそこにいた人々以外にもイラン系の法華経信者たちが多く居て、そこに法師（dharmabhāṅka）と呼ばれる出家者がやってきて、様々な民族からなる在家信徒の利益と功德の為に、『法華経』を書写させた可能性について指摘している²⁴⁾。少なくとも何世紀かにわたって、写本は書写され、奉納されていたのだという。

つまり、写本の発見された場所が単なる仏塔跡ではなく、僧侶の住居のような場所あるいは書写する場所であったとすれば、有部の律文献と大乘經典の写本を自覚的に保有していた者（僧侶）がその地域にいて、様々な民族的背景を持つ俗信者とともに、經典を書写し奉納し、儀礼をおこなっていた。それが、少なくとも6～8世紀のギルギット（パローラ・シャーヒ王朝）でみられていた光景であった。ギルギット写本はそうした、少なくとも一世紀以上の幅の歴史の証人であったことになる。

* * * * *

インド国立公文書館と創価大学・国際仏教学高等研究所は今、共同で、1500年近く前から生き延びてきたギルギット写本を、最新の研究成果を網羅し、カラー写真と共に出版している。既刊（2019年4月まで）及び予定巻は以下の通りである。

Gilgit Manuscripts in the National Archives of India. Facsimile Edition. Published by The

National Archives of India and The International Research Institute for Advanced
Buddhology, Soka University.

I. Vinaya Texts. Ed. by Shayne CLARKE, 2014.

II. Mahāyāna Texts:²⁵⁾

II.1. *Prajñāpāramitā* Texts (1). Ed. by Seishi KARASHIMA *et al.*, 2016.

II.2. *Prajñāpāramitā* Texts (2). Ed. by Seishi KARASHIMA and Tatsushi TAMAI, 2019.

II.3. *Samādhirājasūtra*. Ed. by Noriyuki KUDO, Takanori FUKITA, and Hironori TANAKA, 2018.

II.4. Further *Mahāyānasūtras*: *Ratneketu-parivarta*, *Kāraṇḍavyūha*, *Ajitasenavyākaraṇa* and

Avikalpapraveśasūtra. Ed. by Adelheid METTE, Noriyuki KUDO *et al.*, 2017.

II.5. *Samghāṭasūtra* and *Bhaiṣajyagurusūtra* (in preparation).

III. *Avadānas* and Miscellaneous Texts. Ed. by Noriyuki KUDO, 2017

IV. Smaller Texts, *Dhāraṇīs*, and Unidentified Folios (in preparation).

注

- 1) これらについては松田和信「中央アジアの佛教写本」『新アジア仏教史5 中央アジア 文明・文化の交差点』, 東京: 佼成出版社, 2010, 119-158 を参照のこと。
- 2) 先ずは新聞の記事として公表された (Articles in *Stateman* (Calcutta) 1931/7/24; in *Times* 1931/9). 後に Aurel Stein, "Archæological Discoveries in the Hindukush," in: *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, No. 4, Oct., 1931, 863-865.
- 3) Sylvain Lévi, "Note sur des manuscrits sanscrits provenant de bamiyan (afghanistan) et de gilgit (cachemire)," in: *Journal Asiatique*, Janvier-Mars 1932, 1-45 に引用される Stein からの手紙 [1931/11/9付] による (p. 22)。更に Karl Jettmar, "The Gilgit Manuscripts: Discovery by Instalments," in: *Journal of Central Asia*, IV-2, 1981, 1-18, 特に p. 6。
- 4) 1931年8月8日付のシルヴァン・レヴィ (Sylvain Lévi)宛ての手紙。Lévi はそれを元に、アフガニスタンとギルギットから発見された写本についての長い報告を出版する (Lévi 1932)。発掘地について、Stein は「ギルギット駐屯地から西に2マイル」(Stein 1931: 863) とするが、Hackin は「北に3マイル」(Lévi 1932: 14) とする。
- 5) Hackin の報告によれば (= Lévi 1932: 15)、写本は遺構 C の「内室の中央には5つの木製の箱があって、第5のものに写本を詰めた他の4つの箱が入れられていた」という。また、渡辺照宏「幻の写本・法華経ギルギット本——法華経原典最古の写本」『大法輪』昭和49年7月号 (1974), 94-101参照。更に、1938年に発掘を行う Kaul Shastri はこの直後にギルギットからその時に発見された数点の写本と飾り板、仏像を送ってもらって、実物を調査している, Madhusudan Koul, "Report on the Manuscripts found at Navapura (Gilgit)," in: *The Seventh All-India Oriental Conference, Baroda December 1933*, Baroda: Oriental Institute, 1935, 6-10.
- 6) Jettmar 1981: 6. Jettmar が1980年8～9月にナウプールでの調査時に収集した話によれば、そのあたりは牛の放牧地であり、高さを削る為に付近一帯で掘り起こしがされていたこと、その際に木製の梁 (wooden beams) に突き当たったこと、そして一旦はそこで掘り起こしが中断されたが、村人の一人が密かに掘り起こし、木製の大型箱 (wooden chest) を掘り出してきた。その中にある種の「本」(即ち、写本)が入っており、その段階で当局に通報がなされて、一帯はこれ以上の発掘

が禁止された、ということである。

- 7) Madhusudan S. Kaul Shastri (Madhusudan Koul), "Report on the Gilgit Excavation in 1938," in: *The Quarterly Journal of the Mythic Society* 30, 1939, 1-12 and 15 plates. 写真の記録として残っているのは、Kaul Shastri の報告書に掲載されたものがあり、Gérard Fussman, "Dans quel type de bâtiment furent trouvés les manuscrits de Gilgit?," in: *Journal Asiatique* 292.1-2, 2004, 101-150 に画像補正を加えて掲載されている。
- 8) 彩色された写本カバーについては、例えば、Deborah Klimburg-Salter, "The Gilgit Manuscripts Covers and the 'Cult of the Book'," in: *South Asian Archaeology 1987*. Serie Orientale Roma vol. LXVI, 2, 815-830, Figs. 2-3, 4; Pratapaditya Pal, *A Painted Book Cover from Ancient Kashmir*, figures 8 and 9 (<http://www.asianart.com/articles/kashmir/index.html> [last access: 2019-4-11]) を見よ。
- 9) Lokesh Chandra, "A Note on the Gilgit Manuscripts," in: *Journal of the Oriental Institute* IX.2, 1959, 135-140. これまでの研究を網羅した最新のものは Oskar von Hinüber, "The Gilgit Manuscripts: An Ancient Buddhist Library in Modern Research," in: *From Birch Bark to Digital Data: Recent Advances in Buddhist Manuscript Research. Papers Presented at the Conference Indic Buddhist Manuscripts: The State of the Field, Stanford, June 15-19 2009*, ed. P. Harrison and J.-U. Hartmann, Vienna: Österreichische Akademie der Wissenschaften, 2014, 79-135 にある。
- 10) P. V. Bapat, "Gilgit Manuscripts and Numerical Symbols," in: *Journal of the Oriental Institute* XI, 1961-2, 127-131, 特に p. 127.
- 11) Bapat 1961-2 ではあくまでスリナガルから送られたオリジナルリストに基づいて葉数は1668葉となっているが、Lokesh Chandra 195 では1811葉である。それは後者のリストにはニューデリーに運ばれた後に「写本の修復作業後に修正された」(p. 135) 葉数が挙げられているからである。(どちらがオリジナルリストを反映しているかは、意外にもカシュミール州文書局に保存されていたリストを別途入手していた日本の調査隊の報告からも確認できる。1979年に行われた佛教大学による「カシュミール仏教調査」の際に、調査隊はカシュミール州文書局に保管されているギルギット写本の目録を入手した。その目録が小玉大圓「カシュミール仏教研究の課題と展望 (1)」『龍谷大學論集』420, 1982, 54-72, 特に61-64ページに再録されている。ここに挙げられている写本の葉数は Bapat のリストのそれに一致している。)

ところで、現在手にする既刊の写真版では写本の一枚一枚に 3514 までの写真番号が振られている。ナンバリングの基本は1葉の表・裏にそれぞれ番号を振る形であるが、中には表裏を一つの番号でまとめている場合もある。更に重複して収録されたもの、大英図書館蔵の11葉にも番号が振られたり、また未収録のものもある。更に、個々に番号が振られていても実際には一つの葉を構成する断片もあるので、葉としての実数は正確には算出できない。現時点までの写本再編成の

研究に基づいて数え直しておくならば、約1800葉というのがデリー・コレクションの実数に近い。

- 12) 写真版 1: *Gilgit Buddhist Manuscripts (Facsimile Edition)*. Śāta-Piṭaka Series Volume 10, 1-10. New Delhi: International Academy of Indian Culture 1959-1974 (FE nos. 1-3368); 写真版 2: *Gilgit Buddhist Manuscripts, revised and enlarged compact facsimile edition*. Bibliotheca Indo-Buddhica Series 150, 151, 152, Delhi 1995 (FE nos. 1-3368 + nos. 3369-3514 [No. 26, 27: FE 3369-3494, No. 50: FE 3495-3514]).
- 13) テキストは Nalinaksha Dutt によって1939～59年、デーヴァナーガリー文字で断続的に出版された: *Gilgit Manuscripts*. Vol. I, Srinagar 1939; Vol. II.1, Srinagar 1941; Vol. II.2, Calcutta 1953; Vol. II.3, Calcutta 1954; Vol. III.1, Srinagar 1947; Vol. III.2, Srinagar 1942; Vol. III.3, Srinagar 1943; Vol. III.4, Calcutta 1950; Vol. IV, Calcutta 1959 (三卷六分冊で再刊, Bibliotheca Indo-Buddhica Series no. 14, Delhi 1984). 但し、出版されたのは全体の約三分の一の量、即ち1-62番のうち、1, 10, 29-35, 40, 46 の写本である。
- 14) オリジナルリストにはもう一つの番号が記入されている。即ち、「箱番号」(Box no.)である。これは調べていくと、1～5まであり、各写本がその箱に収められていたということであろう。更に、この「箱番号」(“Box no. *”)は各写本の木製(一部は板紙)カヴァーに通し番号(“S[erial]. no. *”)と共に書き込まれている(尚、先の小玉 1982 にも、再録されたリスト中に“Box No.”と言う項目があり、I～Vに分けられている。但し、この「箱番号」については何も触れられていない)。ではこの「箱番号」とはなにか。
- 先に引用したように(注5)、写本は遺構Cの5つの箱の中に納められていたとされ、他方スリナガルから5つの箱に入れて公文書館に移されたことが分かっている(Lokesh Chandra 1959: 135)。つまり、出土したときには「5つの箱」で、スリナガルで保管されていた時も「5つの箱」であった。ということは、「箱番号」は遺構Cの中に埋もれていたときの箱と同じなのではないか、と予想できる(番号の順番は現行の順序ではなかったかもしれない。いくつかの写本がその同じ箱に入っていたかもしれない、ということである)。もし、カヴァーに表記されている「箱番号」が遺跡跡から出土したそれぞれの箱に一致するとすれば、1-62番の番号は元々納められていた箱ごとにつけられた、単なる「通し番号」と言えるかもしれない。「箱番号」で各写本を分けると次のようになるが、ボックス1は律のみ、ボックス3は般若経のみ、法華経はボックス5だけに入っている: Box no. 1 = no. 1 [= Vinaya]; Box no. 2 = nos. 2-23; Box no. 3 = nos. 24-28; Box no. 4 = nos. 29-43; Box no. 5 = nos. 44-62.
- 15) No. 36 『僧伽吒経』[folio nos. 38, 39, 43, 45, 47, 49, 53, 57, 61, 63, 65, 67, 69, 71, 73]; no. 38b. 陀羅尼[folio no. 10]; no. 48. 『法華経』[48葉; 大英図書館にある7葉も同じ]。ウッジヤインにある No. 4S: *Sarvadharmaguṇavyūharājasūtra* が貝葉である。

- 16) von Hinüber 2014, 特に pp. 111-112 及びそれに付された Klaus Wille の “Additional Note on the Srinagar Collection” (appended to v. Hinüber 2014), pp. 112-113 を見よ。このコレクションはかつてベルリンの Chandrabhal B. Tripāthī によって1982年と1987年の二度にわたって撮影がなされた。ところが、第一回目から第二回目の間に約30点の写本の所在が不明になっていて、おそらくはその大半が外部に流出したものと考えられていた（流出したと思しき写本の一部については松田和信「ウダーナヴァルガのギルギット写本」『佛教大学文学部論集』95, 2011, 17-30, 特に「追記」pp. 29-30 参照）。
- 17) S. Sengupta, “Fragments from Buddhist Texts,” in: *Buddhist Studies in India*. ed. by R. Pandeya. Delhi 1975, 137-208. 前二者はそれぞれデリー・コレクションの Nos. 4, 5 と同じ写本に属する。
- 18) Tucci が集めた写本を調査した Francesco Sfera, “Sanskrit Manuscripts and Photographs of Sanskrit Manuscripts in Giuseppe Tucci’s Collection,” in: *Sanskrit Texts from Giuseppe Tucci’s Collection*. Part I, Rome: Istituto Italiano per L’Africa e L’Oriente, 2008, 15-78、特に p. 29 参照。ギルギット写本は2014年の段階ではカラチ国立博物館（National Museum of Pakistan, Karachi）に所蔵されていることまで分かったが、現況に関する詳細は不明である。
- 19) Fussman 2004: 134.
- 20) Fussman 2004: 121.
- 21) Gregory Schopen, “On the Absence of Urtexts and Otiose Ācāryas: Buildings, Books, and Lay Buddhist Ritual at Gilgit,” in: *Écrire et transmettre en Inde classique*, ed. by Gérard Colas and Gerdi Gerschheimer, Paris: École française d’Extrême-Orient, 2009, 189-219, 特に pp. 199-200.
- 22) Schopen 2009: 206ff.
- 23) 写本Cはデリー・コレクションとスリナガル・コレクションに同一写本に属する同じ葉の断片が泣き別れて保存されている唯一の事例である（工藤順之「ギルギット本『スマーガダー・アヴァダーナ』について」『印度学仏教学研究』63-1, 2014, 357-351）。複数の写本があるのは他にも『法華経』や『般若経』などがあるが、これらは全て同じ文字（第1型）で書かれている。
- 24) フォン・ヒニューバー「ギルギットの梵文法華経：写本と信奉者たちと工匠たち」『東洋学術研究』169, 2012, pp. (19) - (39) [和訳：小槻晴明・水船教義], 特に p. (32)。この点に着目して、初期大乘経典の成り立ちを論じた下田正弘「初期大乘経典のあらたな理解に向けて——大乘仏教起源再考」『シリーズ大乘仏教4・智慧／世界／ことば』, 東京：春秋社, 2013, 3-100 も参照のこと（特に pp. 38-42）。
- 25) 法華経写本はインド国立公文書館・創価学会・東洋哲学研究所からレプリカ本として出版された：Lotus Sutra Manuscript Series 12. *Gilgit Lotus Sutra Manuscripts from the National Archives of India*. Facsimile Edition. The National Archives of India,

the Soka Gakkai, and the Institute of Oriental Philosophy, 2012.

図版出典

図 1～3 W. Baruch. *Beiträge zum Saddharmapuṇḍarīkasūtra*. E. J. Brill, 1938.

図 4 『インド国立公文書館所蔵ギルギット法華經写本：写真版』（法華經写本シリーズ12）創価学会、インド国立公文書館、2012年刊

図 5～8 筆者撮影

（くどう のりゆき／創価大学・国際仏教学高等研究所教授）